京都における医史学研究史〔I〕

杉立義一

日本医史学雑誌第三十七巻第四号
平成三年十月三十日発行
平成三年八月二十四日受付

一、まえがき

京都の医学史については既に多くの研究がなされてきた。それはかつて、京都の医学史といえば日本の医学史を意味する時代が、何百年間かあったからである。京都府医師会医学史編纂委員会は、『京都の医学史』本文篇（一五〇〇頁）・資料篇（五八〇頁）を編纂し、昭和五十五年に刊行したが、この大作を以てしても欠落する部門も多くある。しかし刊行後も各地の本会々員をはじめ多くの研究者から、新史料の発表や提示が続いていることは喜ばしいことである。

平成三年六月、京都で開催した第九二回本会総会の医学史展示会第一部において、「京都における医学史研究史」と題して、江戸初期以降、今日に至る間に京都で行われた医史学的研究四二件の事蹟の要点を列記した目録を作り、主なる資料一二〇点を展示供覧した。この展観の意図したところは、京都という歴史的環境の中にあって、われわれの先輩の医史学研究は、何を主題にして行われてきたか、どのような姿勢で望んだか、欠落している部門は何か等を自問することにより、今後の医史学研究の指針を探ることであった。この意味ではある程度効果的であった。

今回、本誌上で「地域の医学史」の特輯に当り寄稿を求められた。そこで京都の医学史そのものについては、直接触れないこととし、京都における医史学研究史について、展示目録の足らないところを補い、若干の解説を附して一文とし

た。もとより検討を要する個所も多く完全なものではない。また年譜式列記の弊は、解説文によって、なるべく一連の流れとして見るように心がけた。

時代区分として、明治前。明治・大正・昭和（終戦まで）。昭和（戦後より昭和四十九年まで）。昭和（昭和五十年以後）・平成・の四期に分けた。これは各期に夫々特色を見るからである。

二、明治前

1、慶長二年（一五九七）一月十五日

『歴代名医伝略』、吉田又玄子編

又玄子とは吉田宗桂の次子、宗恂（意安）であり、宗桂と同じく明国に遊学し、慶長十五年四月十七日没した。京都大学富士川文庫に寛永十年十一月、田原仁左衛門刊行本上下二巻がある。

内容を見るに、すべて中国の名医列伝である。巻之上は上古から唐・五代までの医家一七〇名、巻之下は宋から明まで二一八名の略伝が載っている。中国では古く『史記』に「扁鵲・倉公列伝」あり、また熊宗立の『医学源流』（景泰新元一四五〇年）や李濂の『医史』十巻（嘉靖年間一五二二～一五六六年）等がある。宗恂はこれらを参照して本書を編したものであろう。末尾に「庶幾クハ後学ヲシテ斯ノ道ノ伝統ノ続クベク敬フベキヲ知ラシムベシト云フ」と記している。

2、寛文三年（一六六三）

『本朝医考』三巻、黒川道祐著

黒川道祐（一六二三～一六九一）は広島藩儒医であったが、病弱のため京都にきて、名所旧蹟を探訪して『雍州府志』『日次記事』等多くの著書を残した。本書は本朝医史書の嚆矢であるとの評価を得てきた。巻首に大略次の凡例を載せる。

一、上巻は大己貴命より細川勝元まで、中巻は和気広世を以て始めとし、目医を終りとする。下巻は丸散、薬石の名を載

せ、終には本朝国史のうち医家にかかわる事を悉く抄した。

二、王公より庶人僧侶に至るまで、医業専攻の人でなくとも医事に関わる者は悉くのせた。三韓投化の医も已に我が国に入るときはこれをとった。

三、近世の医家、凡そ三世を歴して一家をなす者は悉く採れり。たとえ官医であっても一世、二世はしばらくおき他日の考えをまつ。

四、凡そ諸家の伝、専ら旧記の本文に従う者あり、また予が新に伝を作る者あり。続者のこれを択むべし。

一、延喜式の薬名、朝野の牒文の文字には疑うべき者あるが、いま旧本の記する所に従った。

一、凡そ各条に愚按を載せるもの有り、悉く低書して以て本文を分かつ。

これを見ても本書は単なる医家列伝ではなく、近代的な意味での医史学書に近いものがある。道祐は随所に自分の意見を入れている。そのため、当時の医家旧家にとっては、自家の家系を公衆の前にさらす事は堪えられない事であった。またその系譜を悪用する輩もあったと思う。そのため家々の子孫が苦情を申立て、本書は絶版となった。

望月三英（明和六年没、七二歳）著、『鹿門随筆』に、「日本の古医伝を黒川道祐著調法なる書なり、何の仔細か、堂上方よりとがめにて絶板になりたるよし、斯様の事にて古事絶ゆる事日本のくせにて気の毒なる狭き事なり」と記している。宮武外骨著『筆禍史』によれば、『本朝医考』が絶版となったのは、享保年間の事であろうと述べている。

3、文政五年（一八二二）

『皇国医林伝』、畑維龍著

畑維龍（一七四八～一八二七）は阿波国出身の儒者であるが、医学院の創立者畑柳安（黄山）の女を娶り、『皇国医林伝』一巻を著わした。藤末氏、親康氏より始めて畑柳安の墓碑銘を最後とする六十八氏の略伝を記している。殆んどが京都を中心とした儒医で占め、江戸の著名医家（多紀氏一統）は全く入れていない。

末尾に維龍の附言がある。その文中に、近世喝蘭之学行われるのは白石、昆陽二先生の賚であるとし、辻蘭空の事蹟を記し、今後蘭書に対する識者がいでることあれば、一大成挙であるとして、蘭学に対する理解を示している。すでに畑柳安の『医学院学範』（天明六年刊）の巻三に、中国、本朝の医史書についての記述あり、つづいて蛮国医説なる一項目を設けている。維龍は『学範』の末尾に勤学文を載せている。

4、天保元年（一八三〇）頃

『日本医譜』七十巻、宇津木益夫著

宇津木益夫（昆台、一七七九～一八四九）は尾張出身の古方派医師、本書は天保元年前後の著書と考える。京都大学富士川文庫には、巻二十五・二十六の二巻（写本）がある。巻二十五は桂川甫筑から武林次庵までの三〇名、巻二十六には並川天民から木澤福庵に至る三〇名の医家の略伝を載せている。本書は稀少であり、他の巻は実視していない。また刊本がでたかどうかも判然としない。

三、明治・大正・昭和（終戦まで）

1、明治十八年（一八八五）十二月六日

『鬼国先生言行録』、新宮義健編

新宮涼庭（一七八七～一八五四）の一代記を、養子の涼閣（義健、一八二八～一八八五）が、涼庭没後三一年を経た明治十八年に編して木版和綴本で刊行した。涼庭の言行、業績も維新後の西洋医学の流入の前に忘れさられようとしていた。そこで新宮一族を代表して第一分家の涼閣が執筆した。顕彰会や門下生でなく、身内の者の編纂によるところに、新宮家らしさを感じる。

明治初年から二十年頃まで、医史学研究の空白期であり、めぼしい医史学書のない年代に、伝記ながらこの書を刊行し

たことの意義がある。なお本書の版木二五枚は完全に保存されている。

2、明治二十四年（一八九一）九月二十二日

『医事集談』、竹岡友仙著、南江堂書店

淀藩医竹岡家の八代友仙（玄真、一八四六～一九一八）は、生来読書、詩文を好み古書の蒐集、編纂につとめ趣味多芸であった。友仙は明治二十二年十月より三ヵ年にわたり『東京医事新誌』に、医史学に基づいた医事談を掲載し、これを二十四年一書にまとめて刊行した。純粋な医史学書とは言えないが、中国・本朝の史実・史談を全巻に展開して医学規範を述べている。友仙は以下に述べるように、明治・大正年間の京都における医史学研究の先駆者であった。

3、明治二十七年（一八九四）四月

『京都医事衛生誌』、京都医事衛生所発行

京都医界には学術雑誌はあったが、時事を主体にした雑誌はなかった。そこで京都医会は機関紙として本誌を発刊（月刊）した。その内容は京都における学術・法令・行事・人事・随想・医史等を含んでいる。竹岡友仙は当初より校閲主任として編集に当った。大正六年十一月までに、内外医家小伝・家系譜・懐旧談・史料等の医史学的記事九十篇を載せている。昭和十八年に廃刊となった。

4、明治三十一年（一八九八）十一月十一日

京都種痘術創始五十年記念祭

京都医会の有志二九名が発起して、紫野大徳寺において、五十年記念祭を営み、日野鼎哉、桐山元中らの慰霊を行った。竹岡友仙は『医談』五十四号（明治三十一年十二月）に、「京都種痘術創始五十年記念祭の趣旨」なる論文を掲載して、嘉永二年九月二十日、日野鼎哉らが初めて種痘に成功した経緯を、その当時はまだ生存していた関係者の談話をまじえて解説した。

5、明治三十二年（一八九九）四月二十四日

京都種痘術創始五十年記念碑建立

記念祭の翌年、記念碑を西大谷墓地の日野鼎墓前に建てた。この記念碑は現在は京都府医師会館の前庭に移されている。

6、明治三十四年（一九〇一）四月二十一日

『日本女科史』佐伯理一郎著　吐鳳堂発行

佐伯理一郎（一八六三～一九五三）は、五年間にわたる欧米での産婦人科学研究を終えたのち、明治二十四年同志社病院に奉職した。その頃より本邦女科史の編纂を志した。明治三十三年三月四日、東京に於て奨進医会の第一回女科先哲祭で講演を行い、つづいて三十三年四月、京都での第二回関西産婦人科学会で、日本女科史について特別講演を行った。それをまとめて刊行したのが本書である。内容はわが国古代より明治中期までの産科学史であり、末尾に本邦女科書目録を附す。その資料として、佐伯と親交があり、当時は建在であった京都賀川本家五代玄吾の所蔵品によるところが大きい。

7、明治四十年（一九〇七）五月十八・九日

京都医学会第四次総会

㈠特別講演　五月十九日、京都大学医科大学解剖学教室において、竹岡友仙は「京都ト日本医学史」と題して講演を行った。古代から天平六年施薬院の創没まで、平安となってからの『大同類聚方』の偽作問題、『医心方』半井家本、仁和寺本についての江戸時代の話題、竹岡自身の見聞した実情を話し、最後にシーボルトに及んで、黒川道祐以後富士川游にいたる日本医史学の概略をのべている。

㈡医史材料陳列　五月十九日、京都医科大学病理学教室において、主として病理学教授藤浪鑑の企画により実施された。市の内外より集めた医書、史料はゆうに千点を超えた。これらを系統的に陳列して展観した。京都においては今日ま

で十数回の医学史展を開いてきたが、今回の展観は最初にしてしかも最大規模のものであった。後日発行された総会誌に出陳資料名が載っているが、ここでは目録のみを転記する。

医史材料陳列　目録

第一門　医書及医事ニ関スル絵画及写真類

第一　本邦医書

㈠平安朝時代

㈡北条氏時代

㈢足利氏時代

㈣織豊二氏時代

㈤徳川氏時代（明治年間ヲ含ム）

（甲）支那医方

（イ）本道　（ロ）外科及梅毒科　（ハ）産科　（ニ）眼科　（ホ）小児科　（ヘ）痘疹科　（ト）鍼灸科　（チ）按摩科

（リ）養生科　（ヌ）診科　（ル）口科　（ヲ）薬物科（本草科）　（ワ）温泉科　（カ）法医科　（ヨ）雑著　（タ）明治年間ニ於ケル漢方医書

（乙）泰西医方

（イ）理化学　（ロ）解剖科　（ハ）生理科　（ニ）薬物科　（ホ）病理科　（ヘ）衛生科　（ト）診断科　（チ）内科

（リ）外科　（ヌ）小児及痘疹科　（ル）婦人科　（ヲ）眼科　（ワ）雑著　（カ）和蘭語辞書及手写蘭書

（附）

㈠史伝及医育　㈡医事雑誌類

㈢医書目録類

第二　支那医書及朝鮮医書

第三　泰西医書

第四　医事ニ関スル絵画及写真類

第二門　遺墨及肖像

第一　遺墨（尺牘ヲ除ク）

第二　尺牘

第三　肖像

㈠画像及木像

㈡写真

第三門　標本、機械及器具類

第一　標本類

第二　機械類

第三　器具類

（附）摸擬漢方医診察処飾附

『第四次総会々誌』によれば、医史材料陳列の項の冒頭に、藤浪鑑の序説がある。富士川游著『日本医学史』が、目録調整に多大の指南を与えたこと、同氏及び竹岡友仙氏が多大の注意を与えたことに感謝の辞をのべている。さらに『総会誌』の巻末に藤浪鑑（五洋）は、「京都医学会第四次総会ノ後ニ記スル」と題して一〇頁にわたる跋文をのせている。この

中で藤浪は自己の医学史観を、るる述べているが、次の一文を抽出しておく。

「吾人日進的医学ヲ攻ムル者ノ翹足期待スルトコロハ、固ヨリ将来ニアリ。吾人ハ徒ニ端座シテ古人ヲ礼拝スルヨリモ、寧ロ勇進シテ生面ヲ開拓ス可キナリ。然レドモ明日ノ奎運隆興ノ由テ来ル所以ヲ知ラズシテ、只管未来ニ向テノミ趨ラントスル勿レ。斯クテハ焉ゾ己レノ立ツ地位ガ何ノ処ニシテ、己レノ進ム道途ノ何ノ辺ニアルコトヲ知リ得ンヤ。故ヲ温ルハ新ヲ知ル所以、後ニ顧ルハ前ニ進ムノ準備ナリ。誰カ敗残ノ廃物ト謂フヤ、観来タレハ亦清新ノ気人ヲ襲フヲ覚ユルナリ。」と。

藤浪鑑（一八七〇～一九三四）は、尾張藩医という家庭環境に育ち、高校在学中から土肥慶蔵と識り、ことに呉秀三とは親交を結んだ。また富士川游とも呉秀三を通じて、大学一年頃から相識となっていた。従って医史学に対する認識は早くからあり、京都着任（明治三十三年）後は、竹岡友仙、佐伯理一郎、半井朴らと医史学研究上の交流も深かった。京都医学会総会陳列会、さらに富士川游の京都出講、学位授与、富士川本寄贈等々、京都における医史学研究に対する寄与は大きい。

8、明治四十年（一九〇七）六月

「木下家史について」、木下凞述

明治六年より京都府療病院に勤務し、初代駆梅院長となった木下凞（一八四四～一九一四）は、小浜藩医木下家四代に当り、同家は同じ小浜藩医の杉田家に師事して親交を重ねた。その家史を『京都医事衛生誌』上に五回にわたり掲載した。同家には杉田玄白・白玄らの尺牘、詩文等の墨跡が伝わっていた。凞はこれを巻子四巻（木下文書）に仕あげた。その題字及び後記は友人富岡鉄斎が書いた。なお同文書は昭和五十五年、野間科学医学研究資料館に収納された。

9、明治四十一年（一九〇八）十二月

「京都府立医学専門学校沿革史」、梅原信正編、『同校々友会雑誌』第四十八号

本校々史は既に板谷忠太郎が、「京都医学校及療病院沿革」と題して『京都府医学校々友会誌』第二―五号（明治三十年）に記載している。明治四十一年十一月六日創立三十年記念式典を挙行し、梅原信正が「我校の沿革史」二九頁を『校友会誌』第四十八号創立三十年紀念号に載せた。

思うに明治初年から中期に至る京都府医学校・療病院の歴史は、単に校史であるだけでなく、明治二年天皇東駕後の疲弊した京都の医学の近代化の歴史でもある。

10、明治四十二年（一九〇九）五月

富士川游、京都で医学史講義

明治四十二年五月、富士川は京都大学医科大学に招かれて日本医学史を講じた。これは荒木寅三郎、藤浪鑑の推挙によったものであり、富士川が国立大学で医学史を講じた最初である。毎週一回入洛して、心血を傾注した講義を行い多くの感銘を与えた。

富士川は明治十三年、京都に游学し医学予科校に一年間ばかり在学した。明治二十年代には京都医家の伝記、家系調査のため子孫や墓地を探訪していた。明治三十七年に刊行した『日本医学史』は単に医界のみならず、他の分野からも高い評価を得た。京都文科大学教授で、京都学派を確立した内藤湖南は『日本医学史』について、「実に明治時代に於けるすべての著書中に在て、第一流に位すべき者たるのみならず、此の種の著述としては、固より我国空前の大著である。（中略）多く読んで少く書いたものである」と推奨した。

明治四十三年三月二十九日、富士川は京都文科大学の史学研究室に招かれて、「偉人の体質」と題した講演を行った。

11、明治四十二年（一九〇九）十二月十～十二日

京都帝国大学図書館十周年記念医書展覧会

出品物は医学大系、医史書目、名家墨跡、著書、稿本、手沢本等。

12、明治四十三年（一九一〇）三月三十日

第十九回医家先哲追薦会、会場・京都帝国大学構内尊攘堂

第三回目本医学会総会が京都市で開催されたのを記念して、先哲追薦会が東京以外の地で初めて行われた。式典ののち次の講演あり。

一、ポムペ・ファン・メールデルフォールト先生　内田銀蔵

一、京都の蘭学者及蘭方医家　大槻如電

一、絵画に現はれたる精神病　呉秀三

終了後、祇園中村桜にて懇親会開催、この会に併せて、三月二十九、三十日京都府立図書館に於て、蘭方医書数百部を展観に供した。

13、大正四年（一九一五）五月

「某生に与へて医史学を論ずるの書」、藤浪鑑識

大正四年、富士川游は『日本疾病史』を医学博士請求論文として、京都大学医科大学に提出した。学位は授与されたが教授会の中には、それに異を唱える人がいた。藤浪はその疑問に答える形で一文を草した。その要点を記すと、

医史学は単なる古物探索ではない、それは歴史的病理学ともいうべく、未来への指針を与えるものである。特に医学の分科が繁多となった今日、それらを綜合し総括するため、医学全体の発達の過程を教える医史学が必要であること等を、欧州の実例をあげて説明して、『日本疾病史』が医学博士を受けるに値することを述べた。この論説は大正七年になって『中外医事新報』に掲載され、また昭和二十年、『藤浪鑑選集』に収められた。八十年後の今日の医界にも通ずる警鐘文である。

14、大正六年（一九一七）

富士川本寄贈、富士川游

富士川游は大正六年、所蔵する古医書四三四七部、八三三一冊を京都大学へ寄贈した。その後も二回にわたって寄贈し、全部で六〇〇〇余部、九一〇七冊を数える。平安時代から江戸時代末期に至るまでの主なる医書が、各科にわたって系統的組織的に及んでいる。京都大学附属図書館に収納され、昭和十七年その目録が出版された。戦後、京都大学医学図書館に移管されて、富士川文庫として全冊貴重本扱いをうけている。

15、昭和五年（一九三〇）四月二十・二十一日

医史展覧会、日本医史学会主催

昭和二年十一月、私立奨進医会を母胎として日本医史学会が創立され、評議員として京都から半井朴・藤浪鑑・佐伯理一郎が参加した。第八回日本医学会総会が四月一日から四日まで大阪市で開催されたのに連動して、京都に於ても医史展覧会が開かれた。次にその案内書を転記する。

我が日本医史学会は、ここに医史展覧会を開き、我邦医学の歴史に関する資料を陳列して篤学なる諸氏の展観に供せむとす。思ふに我邦現時に於ける医学はその光輝燦然として人目を奪ふものありと雖も、その淵源は甚だ遠く、先哲諸公の辛苦経営の多大なりしことを思はざるべからず。こゝに先哲諸公の学術的著述を始めとし、その肖像、遺墨及び遺物の類を陳列し、一は以て我邦医学の発達の跡を尋ね、一は以て先哲諸公を偲ぶの資に供へむとす。その日時及び会場は左記の如し。篤学なる諸氏の来観あらむことを希望す。

昭和五年四月　　日本医史学会

〔一〕日時　昭和五年四月二十日及び二十一日午前九時より午後五時まで

〔二〕会場　京都帝国大学医学部病理学教室

〔三〕展観　無料

陳列品目録

この展覧会は我邦の医学の発達と、それと支那医学及び西洋医学との交渉を一目の下に瞭然たらしめむことを目的とし、その時代は明治維新前を以てその終とし、又その図書はすべて代表的のもののみを選びたり。ここには唯大体の分類を挙げて内容の一端を示すのみ。

第一　古代より徳川氏時代の末に至るまでの重要の医書

第二　各時代の医家が依用せる主要の支那医書

第三　西洋の医学を伝へたる書籍

（甲）蘭学創始以前

（乙）蘭学創始以後

第四　支那と西洋との医学を折衷せる一派の書籍

第五　特殊の興味ある医書その他

第六　肖像

第七　遺墨

第八　図譜類その他

第九　器械及び其他遺物

以上

この展覧会も藤浪鑑の企画推進によるものであろう。

16、昭和六年（一九三一）九月十五日

『医家人名辞書』、竹岡友三編、南江堂京都支店

編者竹岡友三は友仙の三男である。亡父の遺志を継いで友仙が既に集めていた資料、原稿を整理編纂して刊行した。内容は古代より近代までの医家一八五〇名の小伝を記し、各人名毎に引用文献を載せている。題字は荒木寅三郎、土肥慶蔵、富士川游、序文は呉秀三により書かれ、友仙の交游を偲ばせる。

17、昭和九年（一九三四）十一月十八日

藤浪鑑逝去

藤浪の自宅は京都吉田山にあった。この年、第九回日本医学会第一分科会に指定された日本医史学会総会に於て、「地理的病理学」という題で特別講演をする予定であったが、実現しなかった。昭和十年に編集された『藤浪先生追悼録』の中で、富士川游は「五洋博士を憶ふ」という追悼文を寄せた。藤浪剛一は鑑の実弟である。

18、昭和十一年（一九三六）十月七日

『京都看病婦学校五十年史』佐伯理一郎著

本校は新島襄、ドクター・ベリーらによって明治十九年四月に開校された。リンダ・リチャーズらの教育により明治二十一年六月二十二日第一回卒業式を行った。佐伯は明治三十年五月からは校長として本校を管理した。昭和十一年十月七日創立満五十年感謝会を行った。「受けるよりも与ふるは福也」の校是のもとに、本科生八百余名を送り出した。

佐伯理一郎は多くの図書を集めた。

『京都産院文庫図書目録』巻一、大正六年十一月二十三日発行、一万百三十二冊

同巻二、昭和八年七月十日、一万六百九十冊

19、昭和初期

半井朴と川井銀之助

半井朴は半井澄（京都医学校第二代校長、京都医会初代会長）の息、明治二十八年帰朝して東山病院を継いだ。藤浪鑑・佐

伯理一郎らと親交あり、『中外医事新報』（昭和十～十五年）に毎号の如く数多くの医史学的論説、随筆、伝記をのせた。

川井銀之助（一九〇四～一九六六）は京都府立医科大学胃腸科教授、川井家は北野天満宮と関連のある家柄（七保の一）のため、特に菅公に関する医史学的記事を『中外医事新報』、『梅影と杏林』に昭和五年以降二十数篇掲載した。

20、昭和十三年（一九三八）二月二十三日

杏林温故会発会、中野操

京都出身で大坂在住の中野操らが中心となって、杏林温故会を組織し機関誌として『医譚』を発行した。その発会式兼第一回例会が大坂の松坂屋大ホールで開かれた。京都からは清野謙次、佐伯理一郎、半井朴らが評議員として参加した。本会は関西にできた最初の医学史研究団体である。第一回例会の閉会の辞を佐伯理一郎は、次のようにのべた。「……歴史なき民族は敗北する。歴史は比較研究と実証の永遠の自然科学である……」。

21、昭和十三年（一九三八）四月二日

日本医史学会総会、会場第三高等学校

第十回日本医史学会総会が京都市で開催されたのに伴い、第一分科会である日本医史学会は、第三高等学校三階に於て総会并学術講演会を行った。

会長、入澤達吉、委員、藤浪剛一、小田平義、緒方富雄、佐伯理一郎。特別講演、「日本生理学の発達とその思想的展開」浦本政三郎。一般演説、一八題。懇親午餐会は京都楽友会館で二四名出席して行われた。

医史展覧会は四月一日から五日まで、第三高等学校本館に於て開催された。富士川游指導のもとに医書四五五点、書画一五四点が各科別、年代順に配列された。医書の大部分は京都大学及び富士川游所蔵本、書画の大部分は佐伯理一郎の所蔵品であった。佐伯はこの総会で第二十六分科会産科婦人科学会々長をつとめた。

22、昭和十三年（一九三八）十月十五日

『朽木昌綱侯』、京都府立福知山中学校編

同校では郷土先賢を追慕して生徒の薫育と郷土の文化向上に資するため、福知山藩八代藩主朽木昌綱（一七五〇～一八〇二）の伝記を編して刊行した。書中に大槻玄沢、イサーク＝チチングとの交流ならびに昌綱の著書等について記している。

23、昭和十七年（一九四二）六月

『明治文化と明石博高翁』、田中緑紅著、明石博高翁顕彰会発行

明治初期、京都府医療界の近代化を推進した明石博高の業績、人と成りを記している。中に舎密局、療病院、医学校、解剖所、アポテーキ等の開設経過をのせる。

24、昭和十八年（一九四三）十二月十五日

『京都市医師会五十年史』、同史編纂部発行

明治二十三年九月十七日、京都医会設立より、京都府医師会京都支部、同京都市支部、京都市医師会へと変遷してきた昭和十五年十二月までの五十年にわたる沿革を詳細に記した。史料として初期は、京都医学会雑誌より、明治二十七年以降は、機関誌である『京都医事衛生誌』によった。史外録として本会創立以前の医事、衛生施設、法令、古文書、江戸時代医家の墳墓ものせている。

25、昭和十八年（一九四三）十二月二十日

『京都帝国大学史』同大学発行

明治三十年創立以来、昭和十五年末まで四七年間の沿革を記す。第一編は総記として創立、沿革の大要、図書館、学生施設。第二編は学部及び研究所について記す。全巻一二六五頁のうち、医学部は一三九頁から四〇四頁までを占めている。

こののち戦局は激しくなり、研究者も少く、用紙不足も影響して、医史学研究は戦中、戦後の空白期をむかえた。

文　献

(一) 富士川游『日本医学史』三三八頁、六〇四・六〇五頁、真理社、昭和二十三年一月。
(二)『京都の医学史』京都府医師会、思文閣出版、昭和五十五年四月。
(三) 寺田貞次『京都名家墳墓録』村田書店、昭和五十一年十二月。
(四) 望月三英「鹿門随筆」『杏林叢書』下巻　三七一頁、思文閣、昭和四十六年一月。
(五) 宮武外骨『筆禍史』改訂増補再版、朝香屋書店、大正十五年九月。
(六) 江川義雄『広島県医人伝』第二集、平成元年十二月。
(七) 阿知波五郎『近代日本の医学』思文閣出版、昭和五十七年六月。
(八) 観自在庵「本邦医史を研究するといふ事につきて」『医談』三十七号、明治二十九年九月。
(九) 杉立義一「淀藩医竹岡家について」『啓迪』六号、京都医学史研究会、昭和六十三年。
(一〇)『京都府医師会報』第八号、種痘伝来壱百年記念号、京都府医師会昭和二十五年十月。
(一一)『京都府医師会設立20周年記念年表』京都府医師会、昭和四十六年三月。
(一二)『第二回関西産科婦人科学会報告』佐伯理一郎、明治三十四年四月。
(一三)「京都医学会第四次総会誌」『京都医学雑誌』四巻四号附録、明治四十年。
(一四) 木下凞「杉田家と木下家」『京都医事衛生誌』一五九～一六一号、明治四十年六―八月。
(一五) 杉立義一「蘭方医・木下凞について」『日本医史学雑誌』二十五巻三号、昭和五十四年四月。
(一六)「蘭医杉田家・木下家代々遺墨、いわゆる「木下文書」当資料館に寄贈さる」『科学医学資料研究』七五号、昭和五十五年七月。
(一七) 富士川英郎『富士川游』小澤書店、平成二年十月。
(一八) 岡田靖雄「富士川游、呉秀三両先生の間」富士川游先生没後50年記念会講演、日本医史学会、平成二年十月。
(一九) 清野謙次『藤浪先生追悼録』人文書院、昭和十年十一月。

(二〇) 天野重安『藤浪鑑撰集』南江堂、昭和二十年六月。
(二一) 日本医史学会「医史展覧会」『京都医事衛生誌』四三三号、昭和五年四月。
(二二) 日本医史学会編『日本医史学雑誌』索引、思文閣出版、昭和五十五年八月。
(二三) 『医譚』第二号、杏林温故会、昭和十三年五月。
(二四) 『第十回日本医学会会誌』第十回日本医学会、昭和十三年十二月。
(二五) 長門谷洋治「佐伯理一郎と京都(三)—第一〇回日本医学会総会・他」『啓迪』第九号、平成三年四月。
(二六) 日本医史学会編『日本医史学雑誌』復刻版、昭和十九年⑰、思文閣出版、昭和五十三年十月。
(二七) 杉立義一『京の医史跡探訪』思文閣出版、昭和五十九年三月。

(京都市：京都医学史研究所)

Progress of the study of medical history in Kyoto [I]

by Yoshikazu SUGITATSU

The study of medical history was reviewed from predecessor's works and records. These materials were divided chronologically into the following two periods; the pre-Meiji era (before 1867) and the period from Meiji through the mid-showa eras, (from 1868 to 1945).

"Honchoiko" written by Doyu Kurokawa was the first work of medical history of Japan.

The study of Japanese medical history was scarcely done in the first half of the Meiji era, but after then (Meiji 24) it was restarted by Yusen Takeoka, Riichiro Saiki and so on. In Meiji 40 Akira Fujinami emphasized the necessity of the study of medical history, and since then the activity was gradually increased.